

岡山県にある国立ハンセン病療養所「邑久光明園」「長島愛生園」に入所している回復者の思い、そして、ハンセン病問題の解決に向けた活動やそこにある願いを通して「私」にできることを考えてみませんか。

この前、三重県の人から療養所のフィールドワークに来て、私に会いに来てくれました。自分の故郷、三重の人と聞くだけで、何か懐かしく「ええなあ」と心が躍ります。

好きで病気になったわけではないし、そんな人

実家の近くに行くことはあっても、電話すらすることができません。私たちのことが周りに知られることを、家族は恐れていると感じているからです。私たちが故郷から遠く離れた地で暮らして

は誰もいないのです。でも、回復者の家族に対する偏見や差別の話を聞くと、親や兄弟、親族に迷惑をかけたのではないかと思うことがあります。



長島愛生園  
吉田大作さん

いる本当の理由を知らされていない家族もいます。私たちのことをきちんと知ってくれたら、きっと分かってくれるはずなのに。

ある三重県出身の回復者夫妻

## 邑久長島大橋

隔離する必要のない証、人間回復の証として、入所者たちの強い要望で、2つの療養所がある長島に橋が架けられました。現在は民間バスも乗り入れ、入所者も自由に島外へ出掛けられるようになっています。



## 邑久光明園納骨堂

周りから受ける偏見や差別への恐れから、遺骨の引き取り手もなく、亡くなってもなお故郷に帰ることができない多くの人々の遺骨が納められています。



三重テレビ報道制作局長  
小川秀幸さん



## 報道を通しての活動～同じ過ちを繰り返さないために～

私がハンセン病問題の取材を始めたのは、らい予防法違憲国家賠償請求訴訟で原告が勝訴した平成13年。一度病気にかかったら終生隔離、そして子孫を残すこともできない。そんな歴史を知り、日本国憲法が施行されてからもこれほどの人権侵害が行われてきたのかと驚いたのがきっかけでした。

それから18年。三重県庁のハンセン病担当官の苦悩や療養所で暮らす三重県出身者の「里帰り」、戦争と病気との関係などを取材してきました。

回復者の多くが高齢化しており、亡くなっている回復者もとても多いのです。一度間違いを犯すと、本当に取り返しのつかないことになってしまうのです。

この問題の解消に向けて、もっと早く国が対応していれば、そして、私たちマスコミに携わる者をはじめ、市民一人一人が動きを起こしていれば、回復者を隔離し続けること、また、回復者や

その家族に対する偏見や差別を残し続けることにはならなかったと強く感じています。

「ハンセン病問題だけでなく、社会の中にある差別をなくしてほしい」このような願いを多くの回復者から聞きます。これは、社会の中で生きる私たち一人一人に向けられているのだと感じています。

ハンセン病問題を語る時に「人間回復」というフレーズがよく使われます。それは、差別された側が権利を回復したという文脈で使われるのが普通でした。しかし、ある入所者はこう言いました。「人間回復すべきは、果たして私たちの側なのではないでしょうか」と。それは、差別と偏見を放置してきた社会の側が変わらなければならないという問い掛けでした。学習や訪問、交流など私たちができることは少なくありません。少しでも踏み出してもらえればと願って報道活動を続けています。